社会的養護施設職員の養育行動尺度の開発および 養育行動と精神健康の関連の検討

兵庫教育大学大学院 伊藤 大輔

兵庫教育大学大学院 瀧井 綾子

Development of Fostering Behavior Scale at Social Care Institutions for Children and The Relationship between Workers' Fostering Behavior and Their Mental Health

Graduate School of Education, Hyogo University of Teacher Education, ITO, Daisuke

Graduate School of Education, Hyogo University of Teacher Education, TAKII, Ayako

要約

本研究の目的は、社会的養護施設職員の養育行動尺度を作成した後、施設職員の養育行動と職員自身の精神健康状態との関連を検討することであった。社会的養護施設職員 477 名を対象に、養育行動、バーンアウト、職務満足感に関する質問紙調査を実施した。養育行動尺度に関して、因子分析の結果、5 因子 31 項目が抽出され、その信頼性と妥当性が示された。また、施設職員の養育行動と精神健康状態の関連性の検討のため、下位因子間の相関係数の算出を行った。その結果、「子どもの状態観察とそれに基づく支持的関わり」、「将来を見越した問題解決への協同経験主義的関わり」、「日常的な時間と体験の共有」と個人的達成感および職務満足感、「支援者の状況依存的関わりと一方的叱責」、「生活態度と社会的規則の指導」とバーンアウト症状の間に正の相関が示された。前者の行動は入所児の状態にポジティブな影響を、後者はネガティブな影響を与える可能性が示唆された。

【キー・ワード】社会的養護施設職員, 養育行動, バーンアウト, 職務満足感

Abstract

The purpose of this study was to develop the fostering behavior scale at social care institutions for children and to examine the relationship between the fostering behavior and the mental health of the workers at social care institutions for children. A questionnaire survey on fostering behavior, burnout and job satisfaction was conducted among 477 workers at institutions. A factor analysis was performed. Consequently, the scale consisted of 31 items in 5 factors, and the reliability and construct validity were established. In addition, the correlation coefficient between the subscales was calculated. As a result, there were positive correlations between “Observation of the state of children and supporting relationships based thereon,” “Cooperative and empiricism involvement

in future solutions to problem solving," "Sharing time and experiences" and personal accomplishment and job satisfaction, and between " Staff's situation-dependent involvement and unilateral reproof," " Teaching living attitudes and social rules " and burnout symptoms. These results suggest that the former behavior may have a positive effect on the status of the children and the latter may have a negative effect.

【Key words】 social care institutions for children, fostering behavior, burnout, job satisfaction

問題と目的

社会的養護とは、厚生労働省によって「保護者のない児童や、保護者に監護させることが適当でない児童を、公的責任で社会的に養育し、保護するとともに、養育に大きな困難を抱える家庭への支援を行うこと」と定義されている。社会的養護の種類としては、里親や養子縁組といった家庭環境で行われるものと、児童養護施設などの施設で行われるものの2つに大別できる。先進諸外国が里親や養子縁組の制度を充実させていることと比較して、日本においては、国として家庭的養護を推進してはいるものの、施設養育の占める割合は8割を超えている（厚生労働省，2018）。そのため、施設での社会的養護を円滑かつ効果的に行われるような実証的研究を行っていくことが重要であると考えられる。そのためには、まず、社会養護施設職員における養育がどのように行われているのかを具体的に評価することができるツールを開発することによって、実態把握や効果的な施設養育について検討していく必要があると考えられるが、本邦ではそのような尺度は見当たらない。

一方、一般的な家庭環境における子どもの効果的な養育の検討のために、親の養育態度を評価するツールは多く開発されている。これらの知見は、施設環境での養育においても参照できる部分はあるが、そのまま適用するには不十分な点があると考えられる。その理由として、上述したように、本邦の社会的養護は、施設における養育が多くを占めており、少ない支援者で多くの児を養育する必要があるため、施設での支援者と入所児の関係や養育状況は、親子関係とは大きく異なることが挙げられる。そのため、親子のような養育者と被養育者といった1対1の関係性のみならず、教育現場に類似した複数の関係性を前提とした養育が求められると考えられ、このような集団の場における養育では、多くの困難があることが考えられる。例えば、青木（2016）は、入所児が常に集団生活を強いられることによって、緊張状態が続くことや、個々の入所児の状況に対する柔軟かつ迅速な対応が困難であることを述べている。つまり、親子ほどの自由度の高い関係性を持つことが、他の入所児や支援者間に関係に悪影響をもたらす可能性があることを念頭におく必要があるため、社会的養護施設職員は、養育者としての観点とともに、教育現場における教師に類似した観点を持つことが求められていると考えられる。

また、社会的養護施設入所児の特徴として、乳児院を除く施設入所児のうち被虐待経験のある児が50%以上と高いことが挙げられる（厚生労働省，2015）。そして、被虐待児は反応性愛着障害、脱抑制型対人交流障害、複雑性PTSDなど、非常に複雑な症状を呈するとされている。そのため、社会的養護施設における養育は、家庭養育とは異なる対応や専門性が求められると考えられる。複雑な様相

を呈する入所児を支援する過程で、施設職員の心身に過度な負担が生じることも多い。実際に、増沢（2009）は、入所児への対応が困難であるため、被虐待児に関わる臨床現場では、支援者の「バーンアウト以上の状況」が見られると指摘している。そのため、施設職員のサポートが必要であり、被虐待児支援をチームとして連携しながら行う必要性を指摘している。また、増沢ら（2016）は、経験年数によらず、すべての施設職員に共通して施設入所児に対する関わり方の困難さから、職務への自信の低下や無力感の高まりを経験しており、それが心身の不調と関連していることが示唆されている。このことから、社会的養護施設において、入所児に対する関わり方を検討することや、施設職員のメンタルヘルスの向上の取り組みについて検討することが求められている。さらに、養育者の精神健康状態は、被養育者である子どもの行動や情緒に影響を与える可能性が指摘されている。例えば、主な養育者の精神健康状態が子どもの健康状態に与えるネガティブな影響が、他方の養育者の精神健康状態が良好であることによって、その影響力が減弱する（Kahn et al., 2004）ことや、養育者の頻繁な交替が被養育児の愛着形成や情緒、認知的発達に悪影響を及ぼすため（Tizard & Hodges, 1978）、施設職員のメンタル不調による早期離職が、入所児の状態を悪化させる要因となる可能性が考えられる。

以上のことから、入所児の状態や成長に、施設職員のメンタルヘルスが大きく関わっていることが推察され、入所児の効果的な養育を考える上で、施設職員の心理状態を考慮することは不可欠であると言える。そこで本研究では、まず、社会的養護施設職員の入所児に対する養育行動尺度を作成する。さらに、職員の養育行動と職員自身の精神健康状態との関連を示すことによって、入所児に対する効果的な関わり方を検討することを目的とする。

方 法

パイロット版「社会的養護施設職員の養育行動尺度」作成のための手続き

まず、家庭環境での養育行動を測定する、養育態度尺度（鈴木ら, 1985）、養育スタイル尺度（松岡ら, 2011）、愛着-養育バランス尺度（武田ら, 2012）、肯定的・否定的養育行動尺度（伊藤ら, 2014）、および教育現場における教師の行動を測定する、学級担任教師のリーダーシップ行動尺度（三隅・矢守, 1989）、指導行動尺度（弓削, 2012）の6つの尺度の合計235項目から、先述した本研究における養育行動の定義に合致するものを抽出し、187項目をプールした。これらの質問項目から、臨床心理士1名、児童相談所に勤務する看護師1名、心理学を専攻する大学生1名で、内容的妥当性の確認を行いつつ、項目の選定を行った。項目の選定基準は、①支援者による、子どもへの直接の関わり方に関する行動であること、②態度・パーソナリティ・情動・思考は含めず、外顕化した行動であること、③支援者自身の援助希求能力など、子どもとの直接的な関わり以外の職務に関する行動は含めない、④日常的な活動に沿ったものであり、行事等の非日常は想定しない、とした。その結果、147項目が選定された。さらに、内容の重複等を避けるために、項目を整理した結果、67項目から構成されるパイロット版の社会的養護施設職員の養育行動尺度が作成された。

調 査

①質問紙調査手続きおよび調査協力者

筆者が全国の児童心理治療施設（46 施設）に対し、児童心理治療施設およびその関連施設での調査協力依頼を行った。また、A 県内の社会的養護施設（6 施設）に対して、施設心理士会を通じて調査協力依頼を行った。調査協力の承諾が得られた施設は 26 施設であった。調査協力施設には、調査依頼書、アンケート用紙、アンケート用紙封入用封筒を 1 セットとして調査協力者の人数分用意し、筆者が直接持参もしくは各施設に郵便にて送付した。調査用紙の回収は、調査協力者がアンケート用紙に回答した後、アンケート用紙封入用封筒に入れ、調査協力者自身で厳封した後、提出してもらう形式をとった。回収は、筆者が直接施設に赴くか、各施設の担当者にて回収してもらい郵便による筆者への返送を依頼した。最終的に 25 施設から返送があり、その内訳は、児童養護施設 7 施設、児童心理治療施設 15 施設、乳児院 1 施設、福祉型障害児入所施設 1 施設、自立援助ホーム 1 施設であった。調査協力者は 477 人、回収率は 69.84%であった。

②使用尺度

(1) パイロット版社会的養護施設職員の養育行動尺度

上述の工程で作成されたパイロット版尺度を用いた。調査にて得られたデータから、因子分析によって因子構造の確認と、信頼性と妥当性の検討を行った後、分析に使用した。なお、尺度は、各項目について「あなたは普段の業務中に子どもと関わっているとき、次のような行動や態度をどのくらいとりますか。もっともあてはまる番号に○をつけてください。」という問いに対して、4 件法（0：まったくない、1：まれにある、2：しばしばある、3：非常によくある）で回答するものとした。

(2) バーンアウト

施設職員の精神健康状態のネガティブ側面を測定する尺度として、バーンアウト尺度（久保・田尾，1992）を用いた。本尺度は、「情緒的消耗感(emotional exhaustion；以下 EE)」、「脱人格化(depersionalization；以下 DA)」、「個人的達成感(personal accomplishment；以下 PA)」の 3 因子、17 項目から構成され、信頼性と妥当性が確認されている。バーンアウト傾向が高いと、EE および DA の値は上昇、PA の値は低下するとされている。

(3) 職務満足感

施設職員の精神健康状態のポジティブ側面を測る尺度として、職務満足測定尺度（撫養ら，2014）を使用した。職務満足測定尺度は、「仕事に対する肯定的感情」、「上司からの適切な支援」、「働きやすい労働環境」、「職場での自らの存在意義」の 4 因子から構成されており、信頼性と妥当性が確認されている。今回は「社会的養護施設」という環境におけるポジティブな精神健康状態を反映させた指標として、下位因子である「仕事に対する肯定的感情」の 11 項目を、社会的養護施設に当てはまる形に改変し（「患者」を「子ども」に変更など）、使用した。

倫理的配慮

質問紙のフェイスシートに、(1)無記名調査であること、(2)自由意思による回答であり、回答しないことによる不利益は生じないこと、(3)個人が特定される形での情報公開はされないこと、(4)アンケートの提出をもって、研究参加への同意とみなすこと、を記載した。また、アンケート提出の際には、アンケート封入用封筒に入れ、回答者自身で厳封した上で、施設の担当者に提出するように依頼した。

結果

調査協力者の基本情報

調査協力者 477 名中、回答に不備のなかった有効回答者 456 名を分析対象とした。分析対象者のデモグラフィックデータを表 1 に示す。

表 1 デモグラフィックデータ

	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>N</i>	%
年齢	35.39	11.19		
性別				
男性			173	37.94
女性			280	61.40
無回答			3	0.66
勤務施設種				
児童養護施設			143	31.36
児童心理治療施設			269	58.99
乳児院			22	4.82
福祉型障害児入所施設			16	3.51
自立援助ホーム			6	1.32
勤務形態				
常勤			406	89.04
非常勤			43	9.43
無回答			7	1.54
勤務年数	5.82	6.19		
被虐待児対応				
対応業務あり			293	64.25
件数平均	5.35	7.20		

項目分析と因子構造の検討

まず、床効果および天井効果の検討を行った結果、床効果を示した 6 項目が除外された。残った 61 項目に関して、探索的因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行い、スクリープロットの結果が

ら 5 因子解が適当であると判断された。十分な負荷量を示さなかった 30 項目が除外され、最終的に 5 因子 31 項目が抽出された。

次に、各因子の命名を行うため、因子負荷量が高い項目の内容を参考にしつつ、各因子に含まれる項目が想定できるように、筆者および社会的養護の研究に従事する臨床心理士 1 名、臨床心理学を専攻する大学院生 1 名にて協議を行った。その結果、それぞれの因子を「子どもの状態観察とそれに基づく支持的関わり」、「将来を見越した問題解決への協同経験主義的関わり」、「支援者の状況依存的関わりと一方的叱責」、「日常的な時間と体験の共有」、「生活態度と社会的規則の指導」と命名した。因子構造を表 2 に示す。

表 2 社会的養護施設職員の養育行動尺度の因子分析結果

因子名および項目名	因子負荷量				
	I	II	III	IV	V
I: 子どもの状態観察とそれに基づく支持的関わり ($\alpha=.86$)					
子どもの話に耳を傾ける。	.78				
間違っているとわかったときは子どもに謝る。	.76				
子どもの意見や行動をほめたり、お礼を言う。	.69				
子どもが何を求めているか理解しようとする。	.68				
子どもの反応や心情に応じて指導方法を変える。	.66				
子どもと一緒に喜んだり笑ったりする。	.61				
子どもが怖がっているときは安心させようとする。	.58				
できるだけ子ども自身の意思を尊重する。	.49				
日常生活の中で、子ども一人ひとりの様子を見守る。	.47				
II: 将来を見越した問題解決への協同経験主義的関わり ($\alpha=.85$)					
子どもに社会の出来事を話し、関心を持つように言う。	.83				
子どもに、人間の生き方について話す。	.82				
子どもに、勉強は自発的にするものだと話す。	.70				
子どもと将来の進路（進学、就職など）について話す。	.60				
施設内の問題、もめ事などを子どもと一緒に考える。	.56				
子どもと意見が対立したときでも、お互いに思っていることや要望を率直に話し合う。	.47				
子どもに、困ったことがあったら相談するようにいい、相談にのる。	.45				
III: 支援者の状況依存的関わりと一方的叱責 ($\alpha=.80$)					
個人的なイライラを子どもにぶつけてしまう。	.73				
子どもを叱ったり、許したり、ほめたりする基準が、そのときの気分で左右される。	.72				
子どもに対して、乱暴な言葉遣いになる。	.67				
皮肉っぽく叱る。	.64				
子どもがしたいことに文句を言う。	.63				
自分（支援者）のその時々で気分がスキンシップをする。	.59				
子どもが悪いことをしたときには、大声で怒鳴る。	.55				
IV: 日常的な時間と体験の共有 ($\alpha=.81$)					
頭をなでる、握手をするなどのスキンシップをする。	.82				
子どもとできるだけ長い時間直接関わりを持つようとする。	.80				
子どもと一緒に遊んだり、楽しいことをする。	.63				
子どもに、物を大切に使うように言う。	.55				
子どもの学習につきあったり、一緒に掃除をしたりする。	.40				
V: 生活態度と社会的規則の指導 ($\alpha=.72$)					
子どもに、施設の規則を守るように言い聞かせる。					.80
余暇時間、休日の過ごし方など、生活態度をきちんとするよう、子どもに注意する。					.79
子どもに、他人に迷惑をかけないなど、社会のルールを守るように言う。					.58
因子間相関					
	I	II	III	IV	V
I	-	.48	-.09	.58	.34
II		-	.12	.42	.50
III			-	.08	.28
IV				-	.42
V					-

信頼性の検討

尺度の信頼性の検討のため、各因子に対して、Cronbach の α 係数を算出した。「子どもの状態観察とそれに基づく支持的関わり」は $\alpha=.86$ 、「将来を見越した問題解決への協同経験主義的関わり」は $\alpha=.85$ 、「支援者の状況依存的関わりと一方的叱責」は $\alpha=.80$ 、「日常的な時間と体験の共有」は $\alpha=.81$ 、「生活態度と社会的規則の指導」は $\alpha=.72$ であった。

妥当性の検討

尺度の構成概念妥当性の検討のため、因子分析から得られた結果をもとに、5つの因子からそれぞれ該当する項目が影響を受け、全ての因子間に共分散を仮定した確認的因子分析モデルで共分散構造分析を行った。モデルの適合度指標は GFI=.86, AGFI=.84, CFI=.88, RMSEA=.060 であった。

各尺度の基礎統計量

社会的養護施設職員の養育行動尺度、バーンアウト尺度、職務満足感尺度の下位因子得点の平均値および標準偏差を算出した（表 3）。

表 3 各下位因子得点の記述統計量

	<i>M</i>	<i>SD</i>
社会的養護施設従事者の養育行動		
子どもの状態観察とそれに基づく支持的関わり	21.92	4.17
将来を見越した問題解決への協同経験主義的関わり	11.57	4.57
支援者の状況依存的関わりと一方的叱責	3.44	2.76
日常的な時間と体験の共有	10.61	3.07
生活態度と社会的規則の指導	5.14	2.04
バーンアウト		
情緒的消耗感	2.84	0.98
脱人格化	1.80	0.67
個人的達成感	2.71	0.75
職務満足感		
仕事に対する肯定的感情	3.33	0.61

社会的養護施設職員の養育行動と職員自身の精神健康状態との関連性の検討

社会的養護施設職員の養育行動と、バーンアウトおよび職務満足感の関連を検討するため、各尺度の下位因子間の相関係数を算出した（表 4）。その結果、「子どもの状態観察とそれに基づく支持的関わり」、「将来を見越した問題解決への協同経験主義的関わり」、「日常的な時間と体験の共有」に関して、個人的達成感および仕事に対する肯定的感情と弱い正の相関を示した。一方、「支援者の状況依存的関わりと一方的叱責」および「生活態度と社会的規則の指導」は情緒的消耗感および脱人格化と弱い正の相関を示した。

表 4 養育行動と精神健康状態の相関

	情緒的消耗感	脱人格化	個人的達成感	仕事に対する肯定的感情
子どもの状態観察とそれに基づく支持的関わり	.11 *	-.05	.27 **	.38 **
将来を見越した問題解決への協同経験主義的関わり	.15 **	.03	.32 **	.37 **
支援者の状況依存的関わりと一方的叱責	.31 **	.33 **	-.04	-.12 *
日常的な時間と体験の共有	.12 **	-.02	.28 **	.27 **
生活態度と社会的規則の指導	.24 **	.20 **	.07	.06

** $p < .01$, * $p < .05$

考 察

本研究の目的は、社会的養護施設職員の養育行動尺度を開発し、その信頼性と妥当性の検討と、養育行動と精神健康状態の関連性を検討することであった。

因子分析の結果、「子どもの状態観察とそれに基づく支持的関わり」、「将来を見越した問題解決への協同経験主義的関わり」、「支援者の状況依存的関わりと一方的叱責」、「日常的な時間と体験の共有」、「生活態度と社会的規則の指導」の 5 因子から構成される全 31 項目の社会的養護施設職員の養育行動を測定する尺度が作成された。本尺度内容の特徴について、既存の養育行動と比較して簡潔に述べると、本尺度で抽出された「子どもの状態観察とそれに基づく支持的関わり」や「日常的な時間と体験の共有」に関しては、開発の際に項目の原案とした家庭環境における親の養育行動に関する尺度(鈴木ら, 1985; 松岡ら, 2011; 武田ら, 2012; 伊藤ら, 2014)においても、「受容」や「意思の尊重」など、子どもへの肯定的な関わりとして含まれている概念であると言える。また、本尺度の「支援者の状況依存的関わりと一方的叱責」は、既存尺度の「非一貫性」や「厳しい叱責・体罰」など、子どもへの否定的な関わりとして含まれている概念であると言える。つまり、これらの養育行動については、養育環境や対象児の特徴に関わらず、共通して行われる養育的関わりであると考えられる。一方で、「将来を見越した問題解決への協同経験主義的関わり」および「生活態度と社会的規則の指導」に関しては、集団生活が前提となっている行動や、教育現場の学級等における教師に類似した役割としての行動が反映されている。このように本尺度には、社会養護施設の特徴が反映された養育行動も含まれており、社会的養護施設における職員の養育行動を評価可能な内容となっていると考えられる。

そして、本尺度について、Cronbach の α 係数を用いた信頼性検討の結果、すべての因子において .70 以上の値を示し、十分な内的整合性を示すことが確認された。次に、尺度の構成概念妥当性を検討するため、共分散構造分析を行った結果、モデルの適合度指数は概ね良好な値を示しており (Hu & Bentler, 1998; 豊田, 1998; 星野ら, 2005; 豊田, 2007)、採択される許容範囲内の適合度であると言えるだろう。さらに、本尺度の開発の過程において、児童相談所等の施設養育に精通した実践家や社

会養護に関する研究に従事する専門家とともに項目を選定したことから、内容的妥当性についても担保されていると言える。このように、本尺度は、信頼性と妥当性の観点から、社会的養護施設における職員の養育行動を評価する尺度として要件を満たすものであると考えられる。

さらに、社会的養護施設職員の養育行動と、職員自身の精神健康状態との関連性を検討するため、上記で開発された社会的養護施設職員の養育行動尺度の下位因子と、バーンアウト尺度および職務満足感尺度の下位因子間の相関係数を算出した。その結果、「子どもの状態観察とそれに基づく支持的関わり」、「将来を見越した問題解決への協同経験主義的関わり」および「日常的な時間と体験の共有」といった行動を多く行っている施設職員は、個人的達成感や仕事への肯定的感情が高く、精神健康状態が良好であることが示唆された。一方、「支援者の状況依存的関わりと一方的叱責」や「生活態度と社会的規則の指導」を多く行っている施設職員は、情緒的消耗感や脱人格化が高く、これらの行動は精神的な負荷が大きいが示唆された。上野・安藤（2017）は、家庭における親の養育行動と精神健康状態に関して、「応答的な対応」と「物的報酬による対応」は、育児への肯定感を高めるが、「罰による対応」は育児への肯定感を低下させることや、「罰による対応」と「萎縮した対応」は育児への不安感や抑うつを増悪させることを報告している。これは、施設環境における養育を検討した本研究における結果と部分的に一致するものであると考えられる。そして、問題と目的で述べたように、施設職員のメンタルヘルスは、入所児の状態に影響を及ぼすため、前者の養育行動は入所児の状態にポジティブな影響を与えるが、後者の養育行動は入所児の状態にネガティブな影響を及ぼすことが推察される。

以上のことから、本研究において、社会的養護施設職員の養育行動を具体的に評価する尺度が開発されたことや、養育行動が入所児の状態像に及ぼす影響に関する仮説を構築するための基礎的なデータが得られた点は意義深い。今後は、社会的養護施設職員の養育行動が入所児の状態像に及ぼす影響に関して、実証的な検証を行っていく必要があるだろう。

引用文献

- 青木亜里（2016）. レジリエンスを育む心理・教育的支援とは—学校と児童相談所、双方の観点から. 発達, 37(145), 46-51.
- 伊藤大幸・中島俊思・望月直人・高柳伸哉・田中善大・松本かおり・大嶽さと子・原田新・野田航・辻井正次（2014）. 肯定的・否定的養育行動尺度の開発：因子構造および構成概念妥当性の検証. 発達心理学研究, 25(3), 221-231.
- 星野崇宏・岡田謙介・前田忠彦（2005）. 構造方程式モデリングにおける適合度指標とモデル改善について：展望とシミュレーション研究による新たな知見. 行動計量学, 32(2), 209-235.
- Hu, L.-t., & Bentler, P. M. (1998). Fit indices in covariance structure modeling: Sensitivity to underparameterized model misspecification. *Psychological Methods*, 3(4), 424-453.
- Kahn, R. S., Brandt, D., & Whitaker, R. C. (2004). Combined effect of mothers' and fathers' mental health symptoms on children's behavioral and emotional well-being. *Archives of Pediatrics and*

Adolescent Medicine, 158(8), 721-729.

厚生労働省 (2015). 児童養護施設入所児童等調査結果(平成 25 年 2 月 1 日現在). 厚生労働省. 2015 年 1 月, <http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11905000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Kateifukushika/0000071184.pdf>, (参照 2019 年 10 月) .

厚生労働省 (2018). 平成 30 年度版厚生労働白書.

<https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/18-2/dl/07.pdf>, (参照 2019 年 10 月) .

久保真人・田尾雅夫 (1992). パーンアウトの測定. *心理学評論*, 35(3), 361-376.

増沢 高 (2009). 虐待を受けた子どもの回復と育ちを支える援助. 福村出版.

増沢 高・山喜高秀・白井祐浩・丁 泰熙・砂山真喜子 (2016). 「社会的養護 (児童福祉施設) における人材育成に関する研究」報告書. 公益財団法人資生堂社会福祉事業財団.

松岡弥玲・岡田涼・谷伊織・大西将史・中島俊思・辻井正次 (2011). 養育スタイル尺度の作成: 発達の変化と ADHD 傾向との観点から. *発達心理学研究*, 22(2), 179-188.

三隅二不二・矢守克也 (1989). 中学校における学級担任教師のリーダーシップ行動測定尺度の作成その妥当性に関する研究. *教育心理学研究*, 37(1), 46-54.

撫養真紀子・勝山貴美子・青山ヒフミ (2014). 病院に勤務する看護師の職務満足測定尺度の信頼性・妥当性の検討. *社会医学研究*, 31(1), 37-44.

鈴木真雄・松田 惺・永田忠夫・植村勝彦 (1985). 子どものパーソナリティ発達に影響を及ぼす養育態度・家族環境・社会的ストレスに関する測定尺度構成. *愛知教育大学研究報告*, 34, 139-152.

Tizard, B., & Hodges, J. (1978). The effect of early institutional rearing on the development of eight year old children. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 19(2), 99-118.

武田江里子・小林康江・加藤千晶 (2012). 母親の子どもに対する「愛着・養育バランス」尺度の開発 第 1 報—母親から子どもへの「愛着」「養育」の構成因子の抽出—. *日本看護科学会誌*, 32(1), 30-39.

豊田秀樹 (1998). 共分散構造分析—構造方程式モデリング— [入門編]. 朝倉書店.

豊田秀樹 (2007). 共分散構造分析 [Amos 編] —構造方程式モデリング—. 東京図書. P18.

上野智江・安藤智子 (2017). 養育行動が幼児の行動と親の精神的健康に与える影響. *教育相談研究*, 54, 1-13.

弓削洋子 (2012). 教師の 2 つの指導性機能の統合化の検討—機能に対応する指導行動内容に着目して—. *教育心理学研究*, 60(2), 186-198.